

---

# **それさえもおそらくは普通の出来事**

AQUA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それさえもおそれくは普通の出来事

### 【Zマーク】

Z6877Z

### 【作者名】

AQUA

### 【あらすじ】

そろそろおばさんと呼ばれることにも慣れ始めた、Jバージュ普通な専業主婦、宮束さつき。

『ねえ、お星様。あたしがもしもぜんぜん普通じゃなかつたとしたら、一体どんな人生を歩んでいたと思う？

もつ少し、ワクワクドキドキ出来ていたのかしらね？』

秋空にひときわ輝く星に何気なく問い合わせたその日、彼女の『普通』

は終わりを告げた・・・。

## 序文（前書き）

お初にお会いにかかりますAQUAと申します。  
初投稿ですので、多分にお会い汚しがあるかと思います。  
生暖かい日でお読み下さこ・・・m(ーー)m

## 序文

「 もう9月があ・・・」

ベランダの手摺りに身を寄せ、紫煙・・・と言ひには少しばかり薄い灰白色の煙と一緒に吐き出した瞬間に、富束さつきは我が事ながら思わず苦笑を漏らした。『もう』と言つからには、何か比較となるような基準があつてしかるべきなのに、それがまったく思いつかなかつたのだ。

夜空を見上げていた目線を下げ、右手の人差し指と中指で挟んだタバコの先に灯つた炎を見つめてみる。

けれど、そんな事をしてみてもやはり何の基準も対象も思いつかない。

ああ、ショーもな。

もう一度、今度はわざと苦笑してそのタバコを咥え、胸いっぱいに煙を吸い込んで、また空を見上げた。

東の空に、やつきました気が付いていなかつた一際明るく輝いている星をひとつ見つけて、ほんの少しだけ気持ちが和むのを感じた。

「 セツナジー。そろそろ鍋、煮えるぞー」

「 はいはーい。これ吸い終わつたら、入るー」

窓ガラスの向いへ、リビングから掛けられた声に、声だけで返事をして、また煙を吐き出した。

あたしつて、ほんと普通よねえ・・・。

宙に流れ消えていく白煙を眼の端で追いつつ、心の中だけで一人ご  
ちる。

そう。彼女は、世間一般の観点で見れば「ぐく」く普通としか言いようのない人生を歩んでいた。物心つくまでも、それからも、ずっと。義務教育の9年間と女子高校生と呼ばれていた3年間は、生徒会や委員会の役員をするでもなく、部活で華々しい活躍をするでもなく。高卒で就職したホームセンターでは、何人もいる事務員の中の一人として、毎日のルーチンワークを淡々とこなしていただけだった。馴染み業者の営業だつた夫と知り合い、いつの頃からかプライベートで一緒に出かけるようになり、恋に落ち、プロポーズを受け結婚した事も、よくある事でしかない

ドラマや映画のような『特別』な事は何一つとして起こらない、遭遇する事もない、絵にかいたような平凡な人生。

アニメや小説に出てくるような『非日常』的なワクワクやドキドキに、憧れた時期が無い事もない。

けれど、そういう『非日常』が日常となってしまっている主人公達がそれで幸せなのかといえば、文中に『俺の（私の）日常を返して』みたいな表現がある以上、意外にそうでもないらしい。

『所詮、隣のバラは赤いなのよね』などと感じる程度には、現実に甘んじている。そんな、どこまでいっても普通の主婦。それが、当年とつて30歳、そろそろおばさんと呼ばれることに慣れ始めてしまった、富束さつきという人間だった。

根元の方、フィルターの手前まで吸ってしまったタバコを、エアコンの室外機の上に置いた灰皿に押し付けて残り火をもみ消した。

もう一本、吸おうかな。

そう思つたけれど、先ほど返事をしてしまった手前、それも拙い。大きく溜め息をついて、手摺りから離れた。窓に手をかけ、ふと思いついて振り返り空を見上げると、先ほどの明るい星はまださつき

の場所に輝いていた。

ねえ、お星様。あたしがもしもぜんぜん普通じゃなかつたとしたら、一体どんな人生を歩んでいたと思う？

もう少し、ワクワクドキドキ出来ていたのかしらね？

それは問い合わせといふよりは、願望の吐露に近かつたかもしない。ふつ、と吐息をついて。さつきは、改めて窓枠にその手を伸ばした。

## 序文（後書き）

誤字・脱字の『』指摘、『』感想など『』れこましたら、お気軽にお願ひいたします。

更新ペース『蠅牛の『』とし』かもしだれませんが、元結はせぬつ  
もつです・・・。

- - - - -  
2010 / 10 / 23 改行、字下げなど修正  
2010 / 10 / 24 改題

「うわ。モノモー。

土曜の気だるい午後。

昼食の片づけを終え、朝からソワソワと落ち着かなかつた夫は、「ご希望通りパチンコ屋に送り出した。

さて少し休憩だ、とばかりにソファに身を投げ出しつとした、まさにその時。

狙いすましたかのように来客を告げたドアホンの、液晶画面に映る男の第一印象がそれだった。

たつぱり10秒程はその映像に見入ってしまつてから、はつ、と我にかかる。

いけない。お密せんだつたんだ。

慌ててエプロンを外して髪を手櫛で整え居住まいを正し（とはいえ、相手にこぢらは見えていないのだが）、応答ボタンを押し込む。

「はーい。どちらをまじょうか?」

「あ、こんにちば。わたくし、弁護士の袴はがまと申します」

「・・・弁護士さん?」

「はあ」

宗教や新聞の勧誘なら一言で斬つて捨てて追い払つてやう、と意氣込みかけていた頭の中が、一瞬真っ白になる。

へらつ、としか形容の出来ないユルい笑顔を向けてくる、弁護士を名乗る男。

何とはなしに、ドアホンの応対だけで追い払うのは無碍むげも無いと感

じて、とつあえず話を聞いてみるくらいにいが、ヒグアに向かつた。

「改めまして、こんにちは。わたくし、『月葉弁護士事務所』から参りました、袴と申します」

リビングを占拠するソファセッターの対面に腰を下ろし、少しよれた名刺を差し出す袴弁護士に、さつきは内心の苦笑を禁じ得なかつた。あまりにも第一印象そのまま、いや、それ以上に、見るからに『三つそう』なのだ。

貧弱というわけではない。

上背はあるし、かつちりした肩幅は十分広い。  
パリツとノリのきいた半袖のYシャツから伸びる一の腕は、知り合つた頃からずっと外商の営業を続けている夫のそれに負けず劣らず、とまではいかないものの、程よく日に焼け、筋肉もついているようだ。

しかし。

前かがみ氣味に丸められた背筋。エアコンが効いた部屋の中にいるといつのに、なぜか頻繁に額の汗をハンカチで拭うその仕草。ややたれ目氣味な目。まつすぐ合わせようとせず、落ち着かない目線。へらへらとしたしまりのない笑顔。

プラス要素を打ち消すマイナス要素が強すぎて、どうにもこうも軟弱な印象を覚えてしまつ。

「ええと、表でお話をさせていただくものの少々アレな話ですので、出

来れば・・・」などという言葉とその纏う雰囲気に、つい頷いて部屋に上げてしまったのだから、弱々しさとナントヤラは使いよう、とでも評してあげるべきなのかもしれない。

「・・・で。その弁護士さんが、どんな御用でしょ?」

無意識に見つめてしまっていたらしく、笑いが少々困ったようなそれに変わっている袴弁護士に気が付き、名刺を受け取りつつ大袈裟にコテンと首を傾げて見せる。

無料相談だとか、そういうのにお申し込みしたような覚えもないし。

まさか、ダンナが・・・・って、そんなわけないしねえ?

お小遣いに渡した一万円札を大事に大事に財布に収めていた、邪気のまったく無い笑い顔を思い出す限り、隠し事があるよには到底思えなかつた。

こんなにヨワソウな人を雇つているのだから、『月葉弁護士事務所』とやらも細々と経営している小さな事務所なのだろう、などと失礼な事すら考えてしまつ。

どこぞに依頼された国勢調査もどきのアンケートか、最近とみに増えているという、振り込め詐欺や悪徳金融の被害調査、あわよくば弁護の依頼をとるための営業か。

「実は、ですね・・・」

そう言つて、袴弁護士がその分厚いA4サイズの茶封筒をカバンから取り出すまで。

さつきは、それが自分自身に関わつてくる事柄だとは、全く考えていなかつた。

「・・・はあ？？？」

開口一番に夫、富束伊知郎が漏らしたのは、「ボチ」とこの名の「猫」でもみたかのような、そんな声だった。

その気持ちも分からぬでもない。

貰つた小遣いを増やせはしなかつたものの、どうにか減らさずに帰つてきて、少々早めの夕飯を食べようかといつ席で聞かされたのが、荒唐無稽も甚だしい話だつたら誰でもやうなるだらう。

しかも。

「だからあ。なんともわからんちんなんだけど、あたしを！」押忍おとなる  
しいの」

箸を咥えたまま、テーブルの端に居座る茶封筒とその上に引き出された書類の束に向けるさつまの田川も、多分に懷疑的な色が浮かんでいるのがそれに拍車をかけている。

「だからってなあ・・・。つていうか、わつき、お前それ信じるのか？」

「んー・・・。けつじつあやしこよねえ・・・。」

「怪しさ大爆発だろつ！？」

箸を取り落とす勢いで、我慢ならないとばかりに、びしっ、と指差す書類の一枚目には、黒々とした毛筆の流れるような筆跡で、いつ

書かれていた。

『富束家 後継選定の儀 次第』と。

袴弁護士は語つた。

平城の時代から続く由緒正しい家柄の一つに「富束一族」がある。表の社会に名を出す事は一切無く、社名や、株式投資、ヘッジファンドなどで『商品』『商標』としてその名を知られる事すら無いその一族は、しかし、何時の時代も歴史の裏でその栄華を極めていた。いや、極めている、と。

「これがその一族の家紋です」と、三枚の竹の葉を図案化したバッジを見せられて、さつきはその話に、少くとも一部は真実だらうと感じた。

街に出かけた時などに、コンビニや商社の看板に幾たびか同じ図案を見かけた事があつたからだ。

ただ、その全てがそれに「富束」ではない別の名を名乗っているから、その関連性には全く気が付かず、たまたま良く似た社章なんだなあ、程度の感慨しか抱いていなかつたのだが。

その一族の総帥たる「富束総柄」<sup>そうへい</sup>が、突然の病に倒れたのは、今から半年ほど前のこと。

兄の死によつて総帥の座に就いた総柄は息子や娘を持たず、兄弟・姉妹もいないために後継者がいない。

これから子を成す事も出来ず、かといって、一族に深く関係してい

るとはいえた富束の血の流れていないう者に、家督を譲るわけにはいかない。

焦りを覚えた総柄は、側近全てに指示を出した。「系譜を遡り、富束の血を継ぐ者を探し出せ」と。

困ったのは側近一同だった。

そもそもこれだけ力を持つ一族の純血であるなら、総柄の近くにいるわけが無い。

それが今の時点で総柄のみしかいないというなら、総柄こそが一族の最後の一人なのではないだろうか。

探すだけ無駄なのではないだろうか。総柄がそれと認める者に、後を任せてしまつてもいいのではないだろうか。

しかし総帥の命令は絶対。

無駄なことかもしれないとは思いつつ、信用のおける筋を利用して、一代、二代と系譜を遡っては、その人間関係（愛憎関係と言つてもいい）を調査し。

血が受け継がれている可能性があると分かれれば、健康調査や保険勧誘を名目でDNA鑑定まで行い。

そして半月前。ようやく九代前の総帥の弟、「宮束詠之進<sup>えいのじん</sup>」の血統に辿りついた。

「ちょっと待つて。九代前って、何時の時代の話よ」

「ざつと200年くらい前でしようから、江戸後期くらいでしょうか？ 確か、滝沢馬琴の南総里美ハ犬伝が発行されたのが、その頃だつたと思いますよ？」

「・・・知らないわよ。そんなんの」

壮大なというべきかなんと言つべきか、半ば呆れかかっているところに、袴弁護士はさらに説明を続ける。

家を捨てた詠之進は、一族といつ枷に縛られることを嫌い出奔した（らしい）。

流れ流れて豊前国一（九州北東部辺り）に辿りつき、そこで妻を娶つて子を持つた。子はさらに子を成し、その子もまた同じく。そして200年近い時が流れた。

空いた口がふさがらない、というのは正にこの事を指すのだらう。いや、寧ろ呆れて物も言えない、の方だろうか。

話の行きつく先が見えた。しかし、そんなはずはない。ワザと大きな溜め息をつき、頭を左右に数回振り、さつきは、にこやかな薄笑いを浮かべ続ける来訪者にジト目を向けた。

「あのね」

「はい、何でしちゃ？」

「『宮束』って姓は夫のもので、あたしの旧姓は『竹本』なんだけど…」

あまりにもバカバカしい話に、ここまで付き合つてあげただけでも感謝してほしい、と目一杯の含みを持たせたその一言に、なぜか我が家を得たりとばかり大きく身を乗り出す。

「実は、ですね。豊前国に流れ着いた詠之進は、妻を娶る際に別姓を名乗つたんです」

「まさか？」

「そうです。その際名乗つたのが『竹本』の姓なんです。いやあ、偶然つてすごいですね。『宮束』の姓を捨てた人の子孫が、『宮束』さんと結婚してその姓に戻るなんて。これこそ運命としか呼べないですよね」

放つておけば、それこそ拍手でもしかねない雰囲気で、しきりに頷くにやけ男。

「……で。弁護士さんは、それを信じてるわけ？」

「はい。もちろん」

にこやかな笑みは相変わらず、男はきつぱりはつきり言い切った。

「富束さつきさん。貴女は『富束』の直系であり、そして後継者候補のお一人です」

01 「『月』からの来訪者」（後書き）

誤字・脱字の「」指摘、「」感想などござれこましたり、お気軽にお願ひいたします。

2010/10/23 改行、字下げなど修正  
2010/10/24 改題  
2010/11/06 改題（タイトル頭に半角スペースが入つて  
いたので除去）

「……なあ、ほんとに行くのか？」

車窓の向こう側、遮音壜の上と続き田から覗く町並みと空に田を向けたまま、ほそりと咳く伊知郎に、せつときは苦笑いするしかなかった。

「まだ来ておいで、まだ言つ？」

言葉にはせず心の中だけで応えを返し、聞こえなかつたフリをして、膝の上、手提げカバンの中を漁る。田並てのものは、すぐに見つかった。

「伊知郎も、食べる？」

視界に入るようこ差し出したミント系の板ガムを、こちらを見ないまま指先だけで受け取り、わざと包み紙を剥がして口に放り込む。くちひやくちぢやとい、こつもよつ大きな音を立てて噛みしだく、不機嫌そうな横顔。

「ハーハーはお子様なのよね。この人つたら。

自分も同じようにガムを口に放り込む。

一歯み毎にやってくるミントの刺激を楽しみつつ、せつねはまつくりと皿を閉じた。

「次は新山口。新山口です」

アナウンスが聞こえる。田的池はまだまだ先だ。

『<sup>みやつか</sup>宮束家 後継選定の儀 次第』は、こんな招待文から始まつていた。

「宮束さつき 殿

故 宮束斗一郎の末弟、故 宮束詠之進改め、竹本詠之進の血統を受け継ぐ貴殿を、宮束家総帥位後継候補としてお迎えしたく候。については、当家までお越しいただきたく候。

宮束家総帥 宮束総柄 <sup>そつぱ</sup>拝

長い年月栄華を極めているという一族。

その総帥からの文としては、あまりにも簡潔で事務的なそれは、自他共に認める『普通人』たるさつきをもつてして、「嘘くさつ」「と咳かせるに十分すぎるものだつた。

しかし、続く数十枚にわたつて記された血統調査の記録は、重箱の隅を箸でつつくに飽き足らず、塗りの隙に詰まつたカスですらも爪楊枝で穿り返したかのような、微に入り細に入つた堂々たる代物。<sup>はがま</sup>袴弁護士が妙に誇らしげに、「聞いた話ですが、興信所やらなにやら、千を超える組織が動いたそうですよ」と語つただけの事はある。

ちなみに、正統な血統というなら、亡くなっている祖父は仕方が無いとしても、まだ存命なさつきの父はどうなるのかと問い合わせたと

「ひ、「現総帥よりも年若い方」を基準としているとか。納得出来る話はあるが、そこはかない胡散臭さが感じられない事もない。

「で・・・。どうするつもりなんだ？さつき？」

「うん。行つてみてもいいかなって思つてる」

予想に反して肯定的な答えを返したさつきに、伊知郎は絶句し、次の瞬間、猛烈に反論した。

曰く。話が出来すぎる。こんなシンデレラ・ストーリーは物語の中だけで、現実にありえるはずがない。

千以上もの組織を動かすような、そんな大規模な調査がたった半年で行えるはずがないし、九代前、江戸時代の記録なんて眉唾もいいところ。

何より、そんな一族が、過去の系譜を頼らないといけなくなるような、杜撰な『家族計画』をしているわけがない。

『ハイハイ詐欺』や『紹介詐欺』<sup>はかういじ</sup>、あるいは『結婚（婚約）詐欺』に類するような、謀に違いない。などなど。

立て板に水、流れる水のように紡ぎ出されるいちいち尤もな言葉に、同意とばかりしきりに頷く愛妻に、やがて吐き出す言葉も勢いを失つた頃。

「嘘っぽい話だとは思つてるよ」

聞こえた言葉に、伊知郎は耳を疑つた。

「じゃあ、何で？」

信じられないという表情で見返してくる夫に、さつきは苦笑を漏らす。

「これが嘘や騙し事だとしてさ。あたしみたいな『ぐいぐい普通の専業主婦を引っかけるのに、こんなに分厚い資料をでっち上げたり、支度金とか言って大金置いて行つたり。なんでそんな事するんだと思つ?』

「え? ・・・そりや・・・いや、わからんけど・・・」

流れる視線の先には、袴弁護士が「支度金として預かつて来ました」と置いていった、福沢諭吉が刷り込まれた札の束。封印がそのままなどころをみれば、そして一枚も抜かれていないとすれば、きつかり百万円。

「あたしも分からぬ。だから、それを知りたい。『好奇心はネコを殺す』って言うけど。ひょっとしたら大掛かりな騙しなのかも知れないけど。だけど、そんな事をするだけの、何があたしにあるつていうの? ・・・それにね・・・」

「それに・・・?」

「それに、もしも本当だつたら、あたしたち大金持ちだよ?」

小さく弾けたはにかむよつな笑顔。

そう思わせる事が騙しの常套手段だ。とは言わなかつた。否、言えなかつた。

わつきはちゃんと分かつてゐる。分かつていて、相手に乗つてみると言つてゐる。それなら。

伊知郎は、小さく溜め息を吐き両手を挙げた。

「わかつた。じゃ、俺も一緒に行く  
「うん。ありがとう」

「ようこそお出で下さいました。長旅でお疲れのところ、誠に申し訳ございませんが、主人が一刻も早くお会いしたいと申しております」

執事長を名乗り優雅に一礼した、燕尾服姿の初老<sup>ロマンスグレードがぶせ</sup>、高節氏の案内に従つて、長い長い板張りの廊下を奥へと進む。

一体どれだけ部屋があるのか、建坪はどのくらいなのか。

あ、また御手洗いみつけ。

3つ目だったかな。お金持ちって、すごいのねえ。

そんな暢気なことでも考へていなければ、『伝統』や『格式』と言ふ目に見えない圧力に、今にも呑み込まれてしまいそうだった。

延々と連なる、果ての見えない白壁と沿道。

大型車でも楽にすれ違えそうな、瓦葺きの門構え。

門から屋敷まで、蓮の浮かぶ大きな池をぐるりと回り込む、石畳の通路。

玄関先で2人を出迎えた、ずらりと並んだ使用人たち。

これでもか、とばかりに見せ付けられる、到底偽りとは思えない『一族』の力。

隣を歩く伊知郎は、完全に気圧されてしまつているのか、視線を彷徨わせる事すらせず、唯々諾々と歩いているだけのようだった。

「 イトアリヤリヤリコマサ 」

声と共に、一同の足が止まる。

長大な通廊の奥にあったのは、精緻な彫刻に縁取られた両開きの扉だった。重厚な雰囲気を纏うそれが、高節執事長の手によつて、ゆっくりと左右に割り開かれていく。

「 さつき様、伊知郎様。どうぞ、お入りくださいませ。主人がお待ちでござります 」

いざ鎌倉、かな。

思わず手を伸ばし、ぎゅっと握った伊知郎の手は、しかし冷たく、震えるやつしの手を握り返してはくれなかつた。

## 02 「いや、鎌倉」（後書き）

誤字・脱字の「」指摘、「」感想など「」や「」にまいたら、お気軽にお願ひいたします。

なかなか話が進まず、本題に入れません。トホホです・・・。

- - - - - - - - - - - - - - - - - - - -

2010 / 10 / 23 改行、字下げなど修正  
2010 / 10 / 24 改題

「富束さつきさん、でしたな。ようこそ参られた」

目の前、向かい合つように腰を下ろし深々と頭を下げる壮年の男に、さつきはなんとも言えない戸惑いを感じていた。

淡柿色の着物に焦茶色の羽織を纏つたその男が、紹介して貰つてはいないもののおそらくは富束一族の総帥である、富束総柄ヨウジヤクその人なのだろう。

窮屈そうでなくかといつて持て余しているようにも見えない着こなしや、無理のない落ち着いた正座姿から、和服を着慣れている事がありありと分かるし、着ている物は素人目に見ても仕立てが良い。おそらくは、いや間違いなく名の知れた工房の一品物なのだろう。

そして何より目が違う。

柔和な微笑みの中、その瞳にも柔らかな色が湛えられている。しかし、確かに感じる『力』。

決して睨み付けられているといつ事はないし、見下されているという事もない。他を圧するような居丈高な雰囲気があるわけでもない。それなのに。

見られている、観察されている、とはっきり感じる。気配、格、そういう言葉で置き換えた方が分かりやすいかもしない。

『そこに居る』という圧倒的なまでの存在感が、その視線から感じられる。

だけど……。

さつきは男の言葉に強い違和感を感じていた。

『富束』の部分に、だけに強いアクセントをつけていた。それ以外

の部分がすんなりと耳に流れ込んできたため、余計にそう感じるのはかもしれないが、それにしても。

耳慣れない言い慣れない言葉なのであれば分からぬでもない。しかし自分の苗字は男のそれと同じ。そんなはずは有り得なかつた。

ちら、と田だけで隣に座つてゐる夫・・・伊知郎の様子を窺つてみるけれど、緊張しているのか、やけに硬い表情を浮かべてゐるもののが感してゐるよつた氣配はない。

あたしの氣のせい・・・なはずはないし。

思いの淵に沈みかけた刹那、自分がまだ挨拶を返していない事に思い至り、はつとした。

「は、はじめまして。富束さつきです」

「私はせつきの夫で、富束伊知郎と申します」

少々タイミングの遅れた挨拶に、しかし男は氣を悪くした風でもなく鷹揚に首肯した。

「さつせさんと、伊知郎さんですな。私が、家長の富束総柄です。  
いや遠路よつてん。わざやお疲れになつた事でしょつた」

「とにかく微笑みを浮かべ、おもむろに拍手を打つ。

「お呼びだわこますか」

脇の障子が、すっと開いて、正座に三つ指をついたメイドが姿をみせる。和室にメイドとは和洋折衷も良いところなのだろうが不思議

と違和感がない。

和洋折衷といえば、この部屋 자체もかなり凝った造りになつていて。さつき達が通つた扉から部屋の中程までは木目も美しい板張りのフロアなのだが、そこに一段の段と部屋の端から端までを横切る通路が設えられ、その奥に障子で仕切られた和室が鎮座する。

手近なところでは居酒屋などの座敷タイプの個室に近い印象だが、広さで言えば大宴会場並み、部屋の調度は大名屋敷のそれと比べてみても勝るとも決して劣りはしないだろう。

「うむ。客人をお部屋へ案内して差し上げなさい。・・・あと膳もな」

応えを返しておいて、総柄はさつき達に目線を向けた。

「小難しい話は明日にでも。今日はゆっくり休まれるがよろしかろう」

宮東本家、逗留2日目。

広々とした客室での休息と山海の幸を尽くした中にも遠来の客人を労わる趣向を凝らした食事に、長旅の疲れを完全に癒してしまったさつき達は、今日も大部屋に案内されていた。

昨日は気がつかなかつたが、使用人たちが用を足すのに使われている側と反対側の障子の向こうには枯山水の庭園が設けられていたよ

うだ。

開け放たれたその向こうで涼やかな風に木々の小枝が揺れていた。

「ゆづくつと、お休みになられましたかな？」

メイドが運んできた湯飲みを啜りながら問いかける総柄は、枯草色の着物で昨日とかわらぬゆつたりとした微笑みを浮かべていた。

とはいへ、やはり身に纏うその風格には、さつき達・・・所謂『庶民』とは一線を画すものがあつた。

気圧され無用な緊張に身も口も堅くなってしまっている2人に、しかし総柄はその相好を崩しつつ、自ら様々な話を舌に乗せていく。2人が道中通り過ぎてきたはずの町や都市、その近隣の特産や名産に関する含蓄。

スポーツや政治、経済情勢といった時事、芸能関係のゴシップ。

そして、その話術はただ話題豊富なだけではない。

さつきや伊知郎がその話題についていける、ついていけない、いやついていけなくなりそうになるかならないか、そんな微妙な気配すら敏感に察し、その掘り下げる深さを柔軟に変え、または流れるようになりますの話題に前の話題に移行していく。

窓の外に覗く枯山水の釀し出す長閑な雰囲気も手伝つてか、いつの間にかさつきも伊知郎もその緊張を和らげ、本人達も気が付かないうちに「ぐく普通に会話を楽しめるよ」になつていった。

そして。

「さて。」

小一時間程も経ち、数回目のお茶のおかわりを運んできたメイドが退室したところで、総柄が、すっと居住まいを正した。

「他愛ないお喋りもこれはこれで悪くはありませんが、そろそろ本題に入らせていただきましょうかな」

びくり、と伊知郎が肩をすくめるのを横田に見ながら、さつきも姿勢を正す。

「まずは、ひとつお詫びせねばならない」

「お詫び・・・ですか？」

「ええ」

「それは？」

問い合わせながらも、さつきは脳裏に一番ありがちな展開を想像していた。

それは、ここへ来る前から多少なりとも疑っていたこと。後継候補といつのは真っ赤な嘘で、金持ちの道楽に付き合わされただけ。

ちょっとばかりの詫び金も貰えれば良い方で、体よく追い返され、この壮年はちょっとばかりの昏い満足感を得、自分たちは自己嫌悪と『金持ちは信じちゃいけない』という人間不信を得る。

無料で一泊旅行が出来ただけまだマシ、と自分で自分を慰めながら日常へと戻る。

そんな想像だ。

「さつきさんが当家の後継候補のお一人、という話なのですが」

「はい」

そら来た。

さつきは笑顔に力を入れた。

騙されたのは仕方ないが、がっかりしたような顔を見せて最後まで喜ばせてやる義理はない。

伊知郎も内心はどうであれ営業で培つたポーカーフェイスを貫くだろつ。

「下の者の手違いがあつたようで、誠に申し訳ないのですが」

部下に責任をなすりつけるのは金持ちの常套手段。  
さつきは身を堅くし次の一言を待つた。

「候補者は、さつきさんお一人だけでした」「そうですか？」

そういう事でしたら・・・と迷わず腰を上げ暇を告げる。  
そう気を張つていたさつきの耳に届いたのは、全く予想を外した総柄の言葉だった。

今、なんて言われた？

「え、と。あの、それはどういづ？」

氣を利かせた・・・つもりなのだろう。

出鼻を挫かれた感覺に当惑し半ば放心しているさつき本人に変わって、伊知郎が口を挟む。

「どういづ、とは？」

「いえ・・・その・・・候補者がさつき一人・・・とは・・・？」

「ああ。ええ、そうです。当初、と云つてもつい先日の事ですが。候補者として名前の挙がつた方は、さつきさんその他にもうお一方お

られました

「はあ」

なお困惑から覚めやらないやつを置いてけぼりにしたまま、総柄は言葉を続ける。

「それで、『ご案内に伺つた者にはその<sup>はがま</sup>お伝えするよつ指図をしておいたわけです』

「・・・ええ。それは伺つてます」

やつを訪れた袴弁護士は、確かにそう言つていたはずだ。やつは『後継者候補の一人』だと。

「ところが、ですな。もつお一方の所へ出向いた者からの報告で、その方がつい先日事故で亡くなられていた事が分かりましてな」

「・・・はあ」

「それで、結果的には候補者がやつさんお一人だけだった・・・と。いひいう次第なのです。いや、まったく申し訳ない」

謝辞を口にし深々と頭を下げる総柄に、しかしまだやつの頭はついていっていなかつた。

対立候補・・・と言つていいものならばだが・・・、それがいないといつ事はどういつ事か。

「あ、あの」

「はい」

「あたしが唯一の後継者候補、といつ事ですか?」

「さようです」

窓から入る秋の柔らかい日差しの下、好々爺然とした微笑みがしつ

かりと頷くのを視界に留めながら。  
さつきの意識は暗転した。

### 03 「宮束総柄」（後書き）

時間が開いた割には、短いです。

仕事と体調と・・・、一人称への誘惑の所為という事にしておいて  
ください・・・。

- - - - - - - - - - - - - - - - - - - -

2010 / 10 / 23 改行、字下げなど修正  
2010 / 10 / 24 改題

多少は期待していなかつたかと言われば、期待していたとしか答えられない。

自他共に否定のしようが無い一般庶民。

程度で言えば中の中、それこそ絵にかいたような中流家庭。夫婦仲は決して悪く無い。むしろ良いほうだと思っている。

何の因果かまだ子供はいなけれど、だからこそ子供が産まれた時のために毎月積み立てをしている。

「いつかマイホームを買つか建てるかしてみたいよね」などと夫婦で話をした事もある。

夏と冬、2回のジャンボ宝くじは連番を20枚とバラを10枚、必ず買うことにしている。

2人はそんな普通の夫婦だ。

「お金持ちになれたらこんな事してみたいよね」と『夢』を見る、どこにでもいる平凡な夫であり妻だ。

だから『すごい一族の総帥後継者』といつ『夢』を見たのは確かな事だった。

だからこそ。

自分自身が巨大な財閥（？）の後継者候補、それもたつた一人の候補だとはつきり宣言された事は、さつきの精神に大きな緊張を強いた。

『夢』については「もしも叶つたらす」「よね」と笑つていられるからこそ『夢』なのではないだろうか。

「『夢』は願うだけでなく叶えるものだ」などといったHOWTO本が流行する事がある。

けれど、それはもう既に『夢』と云ふよりは『田標』になつてゐるのではないだろうか。

はつきり言つてしまつならば、叶つとう事をあまり期待出来ない、心のどこかで叶わないだろうと思つてゐる希望。

それが『夢』ではないだろうか。

それが叶つてしまつ。いや叶つてしまつた。幸せを感じるより前に、大きな大きな不安を感じた。

ひょっとしてシンデレラも同じような気持ちだったのかしら。（

1）

埒も無くそんな事を考えてしまつ。

継母や異母姉たちに『灰被り』などと蔑まれ虐められていた彼女も、きつと『夢』を見ていたに違いない。

蔑まれる事も虐められる事もなく毎日を暮らす自分を。

他愛ない買い物をしたり、友人と遊んだり、ひょっとしたら淡い恋をしてみたり。そんな普通の自分を。

そんな『夢』が、おそらくは想像を遥かに越えた形で叶つてしまつたシンデレラ。

王子様に見初められてしまつた時、彼女は何を想つたのだろう。  
妃として王宮の住人となり、おそらくは生活そのものが一変してしまつた時、彼女は何を想つたのだろう。

「……わ……・つわ、・・・わつわへ。」

真っ暗な世界に声が響いた。

「……え？」

皿を開けると、妙にぼやけた視界に黒っぽい影。

あ、焦点、合っていない……？

数回瞬きをしてみると、いつも見慣れた顔が心配そうに覗き込んでいるのが分かった。

「……あ……、え……？ あた……し……？」

言葉にならない言葉を呟いている間に、あやふやだった記憶の糸がゆっくりと繋がっていく。  
よつやく、どうやら自分は気を失つてしまっていたらしいこと理解したよつしきが見回してみると、そこはよつしき今までいた和室とは別の部屋。

寝心地から想像するに、自分ほどよつしきに寝かせられていろらじこ。

「あた……し？」

「……ひど。びつくりすぎたのかも知れないな」

さつきの額にかかる前髪を左右によけながら、伊知郎の表情も少し硬い。

微笑も少し曇つてこむように見える。

「総柄さん、心配してたぞ？」

「・・・うん。そうだよね」

「後で様子を見に来る、って言ひてた」

「うん」

8畳間ほどの広さの部屋には今、さつきと伊知郎の2人だけしかいな「ようだつた。

「ねえ・・・」

「うん?」

「あたし、どうしたら良こと思つ?」

「うーん・・・」

「まあ、さ」

「うん?」

「さつきが一番したいと思つたよつにするのがいいんじゃないかな?」

「うう?」

「うん。それで良いと思つ

「・・・そつかあ」

漠然とした問いかけに伊知郎は眉をハの字に歪めて見せた。  
困つたような表情で少し考えてから口を開く。

小さく、悩ましげな吐息を漏らすやつときの前髪をゆつくつと撫でながら、伊知郎は微笑む。

「ま、今は寝とけ  
「はあー」

目を閉じたさつきが安らかな寝息を立て始めるまで、伊知郎がその

手を止めることは無かつた。

宮束本家、逗留3日目。

さつきが意識を失った日の翌日。さつきと伊知郎の2人は、またあの和室に招かれていた。

開け放たれた障子戸の向こうから流れ込んでくる涼やかな風が、床の間に活けられた白い花を穏やかに撫でて去っていく。

「昨日は、失礼しました」

「いえいえ、お気になされぬよう」

深く頭を下げるさつきと伊知郎に、総柄は柔らかな笑みを浮かべ鷹揚に手を振った。

「お体の方は、もうよろしいのですかな?」

「はい。おかげさまで」

「さとうですか。それは良かつた」

穏やかな声音からはまだ安堵のみが伝わってくる。

それを感じながら、さつきは小さく小さく深呼吸をした。

昨日のあの後。夕方過ぎにもう一度目覚めたさつきは、伊知郎に今後自分がどうしたいと思つてゐるのかをはつきりと告げ、伊知郎はただ頷いた。

ただし、それもこれも総柄次第ではあるのだけれど。

「総柄わん」

一瞬の逡巡の後、わつきは口を開くことにした。

「失礼な事とは思いますが、お尋ねしたいことがありますか」「何でしようかな?」

「あたしが『宮束一族の後継者候補』ところのは、本当の事でしょうか?」

「はい」

打てば返す。間すら空けず総柄は答える。

「・・・小市民であるあたし達をからかっていふ、ところの事はありますんでしようか?」

「そのように思われるのも、当然のことじょうな」

聞きよひによひては、いやどんな聞き方をしたとしても失礼極まりないだらうべきの問いかげに、しかし総柄はそれも当然と頷く。

「ですが出来ることなら信じていただきたい。わつきわん、貴女は宮束一族の唯一の後継者なのです」

「後継者、ですか?」

「ええ。今となつてはもう『候補者』といつのは並はまらないでしうな。私の、いえ宮束の後継者です」

「・・・そう、ですか」

「はい。ただし・・・」

「ただし?」

「さつきさんが、それを『了承下されば』・・・ですが。・・・これらがどれほど望んだとしても、わつきわんの血身が拒絶なさるなら、強要は出来ませんからな」

嘘、偽り、「まかし。」さつきには一切感じられなかつた。

横目で見ると、同じよつこにからうを窺つてゐる伊知郎と田が合つた。  
伊知郎が小さく頷く。

曲がりなりにも営業として駆け引きに慣れてゐる彼にも、そういう物は感じられなかつたようだ。

「分かりました。不躾な事をお尋ねして申し訳ありませんでした」

「いえ。当然の事でしょう」

「その上で、そのお話を受けさせていただけますでしょうか？」

「お受け、いただけるのですかな」

「はい」

総柄の眼を真正面から見つめるさつきの心に、もう迷いは無い。躊躇いもない。

宮束一族がどれだけ大きい存在なのか、さつきはまだ良く知らない。  
その総帥などといふ立場が自分に務まるのかどうか、そんな事はわからぬ。

しかし、必要とされているならやつてみよう。

ただそう考へてゐるだけだつた。

「ありがとうございます」

総柄が、宮束一族の現総帥が、まるで土下座でもするかのように畳  
擦れ擦れまで頭を下げた。

そして咳く。誰にも聞こえない程の小さな小さな声で。

「・・・大願、成就せり」

1 もう少し「本当に怖いグリム童話」などの原点系「シンデレラ」「白雪姫」は読んだことがありません。

#### 04 「極東セツヌ」（後書き）

誤字・脱字の「」指摘、「」感想など「」されこまつたら、お気軽にお願ひいたします。

よひやく前置地（へ）が終わつました。

## 05 「動き出す者たち」（前書き）

よつやく（？）、残酷描写が含まれます。  
読みたくない方は、回れ右。です。

## 05 「動き出す者たち」

鉄錆の香りに支配された薄暗い部屋。

大きく開かれた窓から音も無く揺れるレースを抜けて、雲間を縫つた朧な月光が差し込んでいた。

青白く清らかなそれはテーブルに載せられたグラスを柔らかく満たし、そしてその男を白く染め上げている。

少し胸元を開けてラフに着込んだ黒っぽいシャツと濃い色のストラップス。

夜風に流れる赤みがかつた頭髪とやや釣り目がちな眼。テーブルのグラスを見つけ軽やかな足取りで近づいた男は、その中にアイスペールから取り上げた少し溶けかけた氷を一つ放り込んだ。

氷とグラスが触れ合つて、澄んだ鈴のような音が響く。ほんの少しだけその余韻を楽しんでから、慣れた手つきでキヤップを外したボトルをゆっくりと傾けていく。

トクトクと音を立てて注がれる琥珀色の液体がグラスの月光を追い出し、空気に甘い芳香<sup>かおり</sup>が流れた。

一杯目は、一息に喉に流し込み嚥下した。

アルコールが己の消化器官を熱く、そして冷たく灼きながら落ちていくのを感じながら、すぐに二杯目を注ぐ。

一杯目は嘗めるようにゆっくりと、口腔に満ちる苦く甘い色と薫りを味わいながら。

「ふふつ。ずいぶん楽しそうにしてるのね」

艶やかな声が掛けられたのは、男が四杯目のブランデーを飲み干すのと同時だった。

「やつ見えるか」

返事は一言だけ。

振り返りもせず五杯目を注ぎ始める男に、女は瞬きの間だけ苦笑を漏らしてすぐに笑みを浮かべ直した。

簡素なドレスと言つてもお世辞にはならないだらうほどの、少しばかり装飾の多い白いワンピース。

その背中に流した腰までの髪は淡い銀。細い眉とふくらとしたみずみずしい唇。

しかし女に月明かりは届かない。

西洋人形を思わせるその容姿も表情も薄闇に沈んで、たとえ背を向けていなくとも男の目にあはれ氣にしか映らないだらう。それなのに。

「器用なもんだな」

五杯目を空け、更に六杯目を作りながら男が呟く。  
一瞬たりとも振り返つてなどいない。横目で見る事をえしていい。

しかし、それは『勘』などというあやふやなモノではない。視界の外を薄闇の中を『見て』いるだけの事だ。

だから、女も驚かずその笑みを微かに濃くする。

そういう男であり、女だった。

「楽しそうなのは、これのせいしから？」

ちらりと足元、ほの暗いフローリングに広がる『水溜り』に田線を落とし女が囁いた。

女と男を結ぶ直線上に沈んだ歪な形の固まりが、より深く影を落としている。

「やう思つか」

よつやく振り返ったその顔は表情は凍りついたように硬く、笑みの欠片すらも浮かんではいなかつた。

「いいえ。せんせん」

艶然と微笑み、ぴしゃりぴしゃりと静かな水音を立てながらまつすぐに男くと歩み寄る女の足元で、『水溜り』にゆるやかな波紋が流れていぐ。

『じつり。小さな音とともに女の爪先に何かがぶつかつた。

「あなた、邪魔よ」

いつそ甘やかに、囁くよつと女はソレを脇へ蹴り払つた。柔らかな言葉とは裏腹に、じぶじぶと勢いよく転がりぐしゃりといつ音を立て壁にぶつかつて止まる。

ソレに瞬きする時間だけ視線を落とし、しかし何の感慨も浮かべる事無く男は女に向き直る。

その眼に、微かに怪訝そうな彩<sup>いろ</sup>が浮かんだ。

「何があった?」

女の雰囲気は、男の知つているそれと少し違つていた。

上品さを、艶やかさを装い『女』という性を全面に押し出しているもの、その瞳に映る者は男も女もその全てを『物』としてしか認識していない。

誰からも利用されず利用される事を許さず、それでも寄つてくる者は利用し尽くした挙げ句に骨までしゃぶり尽くす。

男の知る女はそういう冷淡で冷酷な女だつたはずだ。  
しかし今の女は違つてゐる。

何かに浮かされたように焦点のぼやけた瞳。恋でもしたかのよう  
に上気した頬。先ほどの声音も常とは違つていたように思えた。

「現れたわ」

「現れた・・・？」

鸚鵡返しに問い合わせる男に、女はくすりと相好を崩す。

「ええ。『姫』が現れたのよ」

「・・・つー?」

無感情だった男の瞳が、大きく見開かれた。

「ええ。その通りよ」

女の声に潜む愉悦。その瞳の奥には滾<sup>たぎ</sup>るような情念が漂つ。  
男が先ほど感じた疑惑の正体はこれだつたのだ。

「とうとう現れたのよ。あの女が。あの『姫』が。ふふふつ。永劫  
と言つても足りないくらい長い長い時間を待つていて甲斐があつた、  
といつべきなのかしら?」

『陶然』とでも表現すればいいのだろうか。

楽しげに語る女の眼は現在を映してはいなかつた。遙か昔に過ぎ  
去つた日を、あの日、あの時を見つめていた。

「十と二百年、か」

心えて咳く男の声にも彩が宿つた。女のそれとは異なり、苦々しくそして憎々しく。

鉄面皮のようだつた顔にも、表情が揺れる。

「やうね。そのへりに経つたかしらね」

「かしらね」と言つて女は、そして男も、過ぎ去つた年月を決して忘れてなどいない。十三の月が百度巡る間、ただその時だけを見つめて生きて来たのだから。

「なら、じんな事はもうやめだな

「ええ。やうね」

足元の黒い『水溜り』に、そしてそこに沈むモノに目を落としながら男が咳き、女が応えた。

一人の他に聞くものもないその声は、薄暗い室内に柔らかく響く。

「他の連中には?」

「もう伝えたわ。貴方が最後よ」

「そうか」

「ええ。やうよ」

ならば、眞も同じ気持ちでいる事だうつな。

声には出さず、男はその面子を思い浮かべた。あの時から共に永劫とも思える時を歩んできた『理由』を同じくする者たちを。

「へへ。へへへへへ・・・・・あつは、あはははははははははははは・」

不意にこみ上げてきた笑いが溢れるのを、男は敢えて止めようと

は思わなかつた。

やつとこの時が来たのだ。来るとは思つていなかつた、しかし心のどこかで確かに待ち続けていたこの時が、ようやく訪れたのだ。自分の中では喜びが弾けるのを確かに感じている今ならば、笑うのも決して悪くない。

見つめる女の顔にも笑みが浮かんでいた。微笑でも艶笑でも哄笑でもない、それは楽しげとも寂しげとも、嬉しげともとれる妖しい笑い。

「・・・行くか」

「ええ。行きましょ、」

「共に『姫』を・・・」

言葉の後半は宙そらに消え、誰もいなくなつた部屋にグラスの落ちて砕ける音だけが虚しく響いた。

翌朝。

会社の接待で一晩家を空けていた男が帰宅して最初に目にしたものは、渴きかけたどす黒い血で染め上げられたリビング。

血だまりに沈んだ、手足が有り得ない方向に捻じ曲げられた首のない屍体。

そして。

厚さを失つて壁に張り付き、眼窩から零れ落ちた眼球ひとみでこちらを見上げる、愛妻の生首だった。

## 05 「動き出す者たち」（後書き）

新章（とい「うか、第1章）突入しましたっ！

頑張つてみたんですけど、やっぱり黒い描[写]つて難しいですね（・・・）

・）ショボーン

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6877n/>

---

それさえもおそらくは普通の出来事

2010年11月11日18時37分発行